

Amoghapāśakalparāja Preliminary Edition および和訳註 (2)

—サンスクリット語写本 ff. 99r2 - 100r6 —

密教聖典研究会

はじめに

本論文は前稿^{*1}に引き続き、*Amoghapāśakalparāja* のサンスクリット語写本^{*2}および、そのチベット語訳・漢訳を用いて、サンスクリット語テキストの Preliminary Edition ならびにそれにもとづいた和訳の提示を主たる目的とするものである。なお、本研究会のメンバーは以下の通りである。

- 種村隆元（本学特任准教授）
- 長島潤道（本学特任専任講師）
- 倉西憲一（本学非常勤講師）
- 山本匠一郎（本学非常勤講師）
- 佐々木大樹（本学非常勤講師）
- 大塚恵俊（総合仏教研究所研究員）
- 横山裕明（大正大学大学院研究生）
- 蓮舎経史（大正大学大学院研究生）
- 駒井信勝（大正大学大学院研究生）
- 名取玄喜（総合仏教研究所研究生）
- 伊集院葉（東京大学大学院博士課程）

*1 本論文末の参考文献表(密教聖典研究会 [2015])を参照。なお、校訂テキストや和訳の作成方針についても前稿(密教聖典研究会 [2015])のイントロダクションを参照。

*2 写本の情報および当該文献のシノプシスについては、密教聖典研究会 [1998: pp.304 – 301; pp.298 – 295] を参照。

今回テキストを提示する箇所は、サンスクリット語写本で ff. 99r2–100r6 にあたり、*sarvakarmasādhanatilakagudikācaturthavidhisādhanam*(「あらゆる儀礼行為を成就するティラカと丸薬に関する第四の成就法」)というコロフォンタイトルのついたセクションである^{*3}。このタイトルからは、密教儀礼におけるティラカと丸薬の適用法、あるいはそれらの制作方法などの説示内容が想定されるが、実際には、額にティラカをなしたり、丸薬を口にすることで得られる超自然的な悉地や攘災招福の諸相を示す内容が中心である。

本論文の構成

本論文におけるテキストおよび和訳の構成は以下のとおりである。まず、サンスクリット語写本のローマ字転写テキストが提示され、次に北京版、デルゲ版を校合したチベット語テキストが続く。チベット語訳テキストに続くのがサンスクリット語校訂テキストで、この校訂テキストに基づく和訳が最後に来る。TEXT は 13 のセクションに分かれているが（但し、§13 はコロфон）、これは便宜的に一応の内容の切れ目で分けたものである。また、テキストおよび和訳の脚注は、4 層に分かれている（必ずしも各ページに 4 層すべてが現れるわけではない）。1 番上の層は和訳註であり、本文の註番号に対応して註が記されている。第 2 層、第 3 層、第 4 層はそれぞれ、サンスクリット語写本のローマ字転写テキスト、チベット語訳テキスト、サンスクリット語校訂テキストに対する註である。註記される箇所の行番号の後に見出し語があり、見出し語に異読などの註記が引き続くことになる。行番号はセクションごとに付されている。例えば、「2.16」は § 2 の 16 行目を意味している。

略号および記号

本論文で使用される略号および記号は以下の通りである。

^{*3} チベット語訳の相当箇所は北京版では ff. 158r3 – 160v2、デルゲ版では ff. 189v6 – 192v3 である。漢訳は大正 20, 324a9 – 325a13 である。詳細は密教聖典研究会 [1998: p.297] を参照。

<i>ac</i>	before correction
Ch.	Chinese translation
conj.	a diagnostic conjecture
corr.	a correction
D	sDe dge edition
em.	an emendation
MS	manuscript
n.e.	not existent
P	Peking edition
<i>pc</i>	after correction
Tib.	Tibetan translation
=	a division of an <i>akṣara</i>
★	<i>virāma</i>
□	a gapfiller
○	<i>puṣpikā</i>
大正	大正新脩大藏經

TEXT

- 1.1 §1 (_{f.99r2})atha tilakam sampravakṣyāmi kularājamantrasya sādhanam | adityasa-
1.2 matejena tārakākāra* jvalanvitai (MS^{pc}; *jvalanvitau* MS^{ac}) tejarājā jvaliṣyati |
1.3 punyarāśi vivaddhate | devānām saha devendrabrahmāviṣṇumaheśva₍₃₎ rāh pū-
1.4 janīyo bhave nityam vidyādharaṣya na samsayam=iti |

(P.f.158r3; D.f.189v7) དྲ-ନ୍ତା-ସୀଣ-ସେ-ୟଦ-ନ୍ତା-ଧର-ସନ୍ଦ-ଧର-ଶ୍ଵା-ସ୍ତ୍ରୀ ରୀଣା-ଶ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେହି-ଶଶଦ-ଶୁଣା-
ସନ୍ଧ୍ୱାନ-ଧର-ଶ୍ଵୀ-ତ୍ରୈ-ପାତ୍ରୀ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-
ଶ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେ-ଶଶଦୀ-ଶ୍ରୀ-ରୀଣା-ଧର-ସନ୍ଦ-ଧର-ଶ୍ଵା-ସ୍ତ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେ-ଶଶଦ-ଶୁଣା-
ଶ୍ଵୀ-ତ୍ରୈ-ପାତ୍ରୀ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-
ଶ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେ-ଶଶଦୀ-ଶ୍ରୀ-ରୀଣା-ଧର-ସନ୍ଦ-ଧର-ଶ୍ଵା-ସ୍ତ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେ-ଶଶଦ-ଶୁଣା-
ଶ୍ଵୀ-ତ୍ରୈ-ପାତ୍ରୀ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-
ଶ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେ-ଶଶଦୀ-ଶ୍ରୀ-ରୀଣା-ଧର-ସନ୍ଦ-ଧର-ଶ୍ଵା-ସ୍ତ୍ରୀ-କୃତ୍ୟ-ଧେ-ଶଶଦ-ଶୁଣା-
ଶ୍ଵୀ-ତ୍ରୈ-ପାତ୍ରୀ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-ମହିଂ-ନ୍ଦ-

- 1.10 atha tilakam.
1.11 sampravakṣyāmi kularājamantrasya sādhanam |
1.12 ādityasamatejena tārakākārajvalānvitai |
1.13 tejarājā jvaliṣyati puṇyarāśi vivardhate || 1 ||

1.14 devānāṁ saha devendrabrahmāviṣṇumaheśvarah |
1.15 pūjanīyo bhaven nityāṁ vidyādharasya na saṃśayam || 2 ||
1.16 iti

【和訳】次にティラカ「に関する儀則」⁴がある

1. 私が部族の王のマントラの成就法^{*5}を説くであろう。[ティラカによって]太陽に等しい光輝を伴い、諸々の惑星のような

*4 当セクションでは、ティラカの作製法について具体的に言及する記述は確認できない。ただし、これまでティラカに関する儀礼は何度か説かれており、たとえば、密教聖典研究会 [1998: p.(32), 8v2-3] には、牛黄 (gorocana) に様々な真言を唱えて眉間にティラカ力をなすべきだと説かれている。

*5 現段階では、この成就法とティラカに関する儀則の関係は不明である。

¹³ vivardhate] em. ← *rnam par 'phel* lo Tib.

光炎を具えて、光輝の王 [たる行者] が燃え盛るであろう。大量の福德が生じるであろう。

2. 諸天のうち、インドラ神・ブラフマー神・ヴィシュヌ神・シヴァ神が共に持明者によって常に供養されるべきであり、このことは疑いない。

と

- 2.1 §2 tilakā kriyamānasya lalāte upari sadā virājite bhāskaratulye ca sahasra-
 2.2 jālīraśmir=avabhāṣitam | sphāṭikam=iva śuddha syāmavarṇā sugandham ga-
 2.3 jabahumbhī gokulānāvadyam samāsaḥitasudāntam=ekasārthaṁmaṇi
 2.4 syāt* | mantraśatasahasrajaptā susādhyam kanakam=iva vastram prajvalantam
 2.5 samantam tilakam=iti

 2.6 द्वृपा नदि शुद्धं त्रुटी विषा च श्रेदं द्वारा त्रुटी त्रुटी विषा
 2.7 शशवा श्रेदं श्रेदं द्वारा वा श्रेदं द्वारा वा श्रेदं श्रेदं द्वारा वा द्वारा
 2.8 वा वारा विषा वारा शुद्धं त्रुटी त्रेदं द्वारा वा श्रेदं त्रुटी त्रुटी वा द्वारा
 2.9 श्रेदं द्वारा त्रुटी त्रेदं द्वारा वा वारा विषा वारा वा वारा विषा वारा वा द्वारा
 2.10 वारा विषा

 2.11 tilakā kriyamānasya lalāte upari sadā virājite bhāskaratulye ca sahasrajālīraśmir
 2.12 avabhāṣitam. sphāṭikam iva śuddha †syāmavarṇa† sugandham gajabāhukumbhī
 2.13 gokulānāvadyam samāsaḥitasudāntam ekasārthaṁmaṇi syāt. mantraśatasahasra-
 2.14 japtā susādhyam kanakam iva vastram prajvalantam samantam tilakam iti.

【和訳】ティラカは、[その]なされている[行者の]額の上で、常にきらびやかで、また太陽の如き[額において]、千の網のような光線が光り輝く。[テ

2.12 *gajabāhukumbhī*] conj. ←*glang po che'i bya ba dang/ dpral ba dang/* Tib. 2.12 –13
gokulānavadyam] em. ←*ba lang gi gnas ltar skyon med* Tib.

ティラカをなした行者は] 水晶のようにきれいであり、黒色で⁶、心地よい香りを有し、象のような腕と額の隆起を有し、牛の群れのように非の打ち所がなく、心が定まりよく [自己を] 調御し、同一の目的を持つ者(行者)たちの摩尼宝となるだろう。真言を 10 万回唱えることによって⁷、ティラカは、金のように普く光り輝く衣服として完成されるだろう。

- 3.1 §3 (4) suśūkṣma bhrūdharāntare lalāṭam virājati sadā nityam khe gate pūrṇa-
3.2 candraṁ jvalati ca janamadhye candranakṣatrārāje ca madhyam bhavati sva-
3.3 janamadhye śakrarājaisurai-r=vā | jvalati ca janamadhye lokarājaikacchattram |
3.4 sugatam=iva sudāntam lokamadhye kacchattram śākyakulam=ivam vaśam sarv-
3.5 vasatvāhitaiśi | evam maṇivara viśuddhaṁ sarvvasatvāhīaiśi | yatha-r=iva sade-
3.6 vake॥ loke₍₅₎śvarekah | varapravaradātā sarvvasatvahitārtham | evam tilaka-
3.7 maṇiprabhāvah sarvvakāmāḥ pradātāḥ | vaśagata-m=upaitidevanāgāsayakṣā ṛ-
3.8 daśapati | indro vaśavarttāsyānūjāte | gandharvvasuragarūḍakinnaramahor-
3.9 age cchāpi bhūtaiḥ sarvve ca vaśagatā vaiḥ | darśanātārakādyālalāṭe nitya vaśa-
3.10 gatā vaiḥ sarvvasatvā bhavanti pranataśirā vaiḥ pādamūle ca (6) nityam ag-
3.11 nir=nar=dahati hrīyate nodakam vā viśagarakākhordadāruṇam mantravivid-
3.12 haduṣṭā nākramante śarīram | maṇi-r=iva prabhāvā sarvve-m=eta na bhonti
3.13 |

3.14 श्वीः कर्क्षेषा श्रीः एव द्युम्ना वा श्रीन् त्रृष्णा वा श्रीः श्वीः एव द्युम्ना-
3.15 वा श्वीः त्रृष्णा वा श्वीः श्वर्वी द्युम्ना वा श्रीः श्वीः श्रीन् त्रृष्णा वा द्युम्ना वा श्रीन्-
3.16 द्युम्ना वा श्रीन् त्रृष्णा वा श्वीः त्रृष्णा वा श्रीः श्वीः श्वर्वी द्युम्ना वा श्वीः श्वर्वी द्युम्ना वा
3.17 श्रीन् त्रृष्णा वा श्रीः श्वीः त्रृष्णा वा श्रीः श्वर्वी द्युम्ना वा श्वीः श्वर्वी द्युम्ना वा श्रीन्

*6 sphatika との関連を考慮すると、黒色 (syāmavarna) と読むのは矛盾するように思われる。実際、Tib. は *mdog dkar ba* とあり、白色と訳出されている。現段階では他に適切な読みを提示することができないため、黒色 (syāmavarna) と理解しておく。

^{*7} 当箇所の訳出は、Tib.(*gsang sngags 'bum bzlas pas*)に依拠した。

3.18 ltar] D; om. P 3.23-24 lha ma yin dang/] D; om. P

3.32 sakrarājeśvara iva || conj. ←*rgyal po dbang po brgya byin lta bu* Tib. 3.33 lokamadhyā
ekachatram || em. ←*jig rten gyi nang na gdugs gcig pa* Tib. 3.33 vāṃśaḥ || em. ←*rgyud* Tib.
3.34 –35 sadevako || em. ←*lha dang bcas pa'i jig rten na ji ltar 'jig rten dbang phyug gcig pu*
Tib. 3.35 lokeśvaraiko || em. ←*jig rten dbang phyug gcig pu* Tib. 3.36 sarvakāmapradātā ||
em. ←*'dod pa thams cad rab tu sbviṇ par bved* Tib.

3.38 taiḥ sarve ca vaśagatā vaiḥ. gaganatārakābhālalāṭe nityam̄ vaśagatā vaiḥ sar-
 3.39 vasattvā bhavanti praṇataśirā vaiḥ pādamūle ca nityam agnir na dahati hrīy-
 3.40 ate nodakam vā. viṣagarakākhordadāruṇam̄ mantravividhaduṣṭā nākramante
 3.41 śarīram. maṇi-r-iva prabhāvāt sarve-m-ete na bhonti.

【和訳】眉間の間において、非常に小さい[ティラカをなした]額が常にきらびやかに輝くのであり、[行者は]^{*8}空中を行く場合、満月のように輝き、そして、人々の中で、また星宿の王たる月の中で中心となり^{*9}、そして、自身の一族の中でインドラ神の如き王の中の王のようになって輝いて、そして、人々の中で世間における唯一の王となり、善逝のようによく自身を調御して世間の中で唯一の王となり、シャカ族のような家系となってあらゆる有情の利益を望む者となる。同様に、最上の摩尼宝となり、完全に清浄で、あらゆる有情の利益を望む者となる。神々を伴った、世間における唯一の自在者の如く、一切有情の利益のために最上の中の最上[の利益]を与える者となる。同様に、摩尼のようなティラカの輝きを有し、一切の願望を叶える者となる。

^{*8} 以下、ティラカをなしたことによって現れる種々の悉地と思われる内容が列挙されているため、当該箇所の主語はティラカをなした「行者」と考えられる。

^{*9} 当該箇所前後には3つのcaが認められるが、そのうちの最初のca(3.2の最初のca)は、前文(susūkṣma bhrūḍharāntare lalāṭam̄ virājati sadā nityam̄)と後文(khe gate pūrṇacandram̄ jvalati)をつなぐものとして解釈した。二つめのca(3.2の二番目のca)は、janamadhyeとcandranakṣatrārajeのLocativeをつなぐものとして解釈した。三つのca(3.3のca)は、前文(janamadhye candranakṣatrāraje ca madhyam̄ bhavati)と後文(svajanamadhye śakrarājeśvara iva jvalati)をつなぐものとして解釈した。ただし、Tib.にはskye bo'i dbus na gsal ba ni rgyu skar gyi rgyal po zla ba dbus na gnas pa bzhin「人々の中で輝き、星宿の王たる月の中心にいるように」とあり、二つめのca(3.2の二番目のca)の解釈が上記と異なる。当該箇所には何らかの混乱があった可能性も否定できないが、現段階では、文頭にLocativeの語が位置し、文末に述語に相当する動詞が位置するという同様の構文が続くと解釈し、前述のとおりに訳出することにした。

3.38 vaiḥ ॥ vaiḥ には、何らかのcorruptionのある可能性が否定できないが、以下(写本転写: 3.9, 3.10, 4.3)にもいくつかの用例を確認できるため、現段階では写本の読みのままでおく。考えられる校訂案としては、vaiであろう。 3.38 gaganatārakābhālalāṭe ॥ conj. ←mkha' la skar ma ltar dpral bar Tib. 3.41 prabhāvāt ॥ conj. ←mthus Tib., 校訂註5.22も参照。同様の形を確認できる。 3.41 bhonti ॥ Cf. BHSgram., 1.29.

神・ナーガ・ヤクシャを伴う三十三天の主が [行者の] 支配下となり, [すなわち] インドラ神が支配下になった後に, ガンダルヴァ, アスラ, ガルダ, キンナラ, マホーラガもまた, ブータたちを伴って [支配下となり], またあらゆる者たちが支配下となる。空の星のような額において, 一切有情が常に支配下となり, 常に足下にひれ伏し, 火で焼かれることはなく, あるいは水によって流されない。毒, 病, カーコールダによる恐ろしい鬼病や, 種々の悪者たちのマントラが, 身体に害を与えることはない。摩尼のように, 威光によって, それら全て [の害するもの] がなくなるだろう。

4.1 §4 jvaramahatiduhkhavyādhitāvāśaraktih | tilakakṛtya-m=iva sadya sarvvem=
 4.2 etat praśāntam | bandhanagatasatvā dañḍavadhyāraho vā tilaka-m=iva
 4.3 kṛtā vaiḥ sarvvam=etad vimuccī | yakṣaśatasahasrāṇi rākṣasāghorarūpaiḥ
 4.4 □□□□□(7)□□□□□□□□□□□□ grahaśatasahasrai nākramante śarīram gajamrga-
 4.5 patiyūtham taskaram bhramśakūṭam giritapprapātam vidyutam sītavātāśinon-
 4.6 durabhaya sarvvi praśamam upaiti tatkṣaṇam tilakam iva kriyamāṇam bhrū-
 4.7 varāntare lalāṭam |

4.8 *स्वेषा ददा शुष्णा नशुष्णा न ददा शुष्णा ददा शुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा*
 4.9 *क्षेत्रं एव ददा शुष्णा नशुष्णा शुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा*
 4.10 *शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा शुष्णा ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा न ददा शुष्णा*
 4.11 *क्षेत्रं एव ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा न ददा शुष्णा*
 4.12 *शुष्णा ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा न ददा शुष्णा*
 4.13 *क्षेत्रं एव ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा न ददा शुष्णा*
 4.14 *शुष्णा ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा नशुष्णा ददा शुष्णा न ददा शुष्णा न ददा शुष्णा*

4.4 □】スペースを埋める記号の末尾に h が残るが, この h もキャンセルされている。 4.4-5 gajamrgapatiyūtham】 ga-ja-mr-ga-pa-ti の 6 字には訂正の形跡が認められる。また欄外に pa ti と読める書き込みあり。 4.5 giritapprapātam】 欄外に pra と読める書き込みあり。

4.9 bzung】 P; gzung D 4.11 drag】 D; bdag P 4.12 brgya】 D; om. P 4.12 'jug】 D; 'dug P 4.13 glog】 D; dro ba P 4.14 grang】 P; glang D

4.15 jvaramahatiduhkhavyādhivātaśirortih tilakakṛtya-m-iva sadyas sarvam etat
 4.16 praśāntam. bandhanagatasattvā daṇḍavadhyārha vā tilaka-m-iva kṛto vaiḥ
 4.17 sarvam etad vimuci. yakṣaśatasahasrāṇi rākṣasaghoraṛūpaiḥ grahaśatasahasrai
 4.18 nākramante śarīraṁ. gajamṛgapatiyūtham taskaram bhramśakūṭam giriprapā-
 4.19 tam vidyutam sītavātāśinondurabhayaṁ sarvam praśamam upeti tatkṣanam
 4.20 tilaka-m-iva kriyamāṇam bhrūdharāntare lalāṭam.

【和訳】重い熱病、苦痛、病氣、風[大の不調による病]、頭痛が、ティラカがなされたならば^{*10}、すぐにそれら全てが鎮まる。足枷のかかった者たち、あるいはダンダ棒によって激しく打たれるべき[罪]に相当する者は、ティラカがなされたならば^{*11}、それら全てを解く。10万のヤクシャ、恐ろしい姿のラークシャサたち、10万の鬼魅が、身体に害を及ぼすことはない。象やライオンの群れ、盜賊、家屋の倒壊、山崩れ、雷光、悪寒、蛇毒、鼠などの

*¹⁰ この iva の用法は不明であるが、文脈を考慮して仮定、条件の意味に訳せるだろうか？当該箇所の後(和訳注 11,13,14)にも同様の用法を確認できる。

*¹¹ 和訳註 10 参照。

4.15 jvaramahatiduhkhavyādhivātaśirortih] conj. ← rims dang/ sdug bsngal ba dang/ nad dang/ rtung dang/ klad nad chen po la Tib. 4.15 tilakakṛtya-m-iva] 当該箇所の iva の用法は不明であり、考えられる校訂案としては eva であろうか。しかし、同様の用法と思われる iva を当該箇所以降にも確認できるため(和訳註 10 参照)、現段階では写本の読みのままにしておきたい。4.16 daṇḍavadhyārha] em. ← chad pas bcad pa'am/ bcing bar'os pa la Tib.
 4.19 sītavātāśinondurabhayaṁ] この複合語には、不明な語が含まれているが、対応する Tib. の読みは、grang(D: glang) dang sbrul dang sdang'jigs kyi'jigs pa thams cad 「寒さ、毒蛇、恐ろしい病のあらゆる恐れ」とある。また、これまでの転写テキストの中にも類似の記述を確認できる。たとえば、密教聖典研究会 [2000: p.(38), f.37v6] sarvvaśītavātāśini prasamayanti /, 密教聖典研究会 [2004: p.(165), f.76r5] agni-r-udakaviṣasastraprapātagṛhebhramaśītavātātapa-asiṇondurabhaya / paṭhitasvādhyāyadarśanamātreṇa sarvvaṇ viṇāśyanti / とある。当該の複合語には、何らかの corruption が疑われるが、上記のような用例のあることを考慮して、写本の読みのままにしておく。4.20 bhrūdharāntare] em. ← smin mtshams Tib., §3: susūkṣma bhrūdharāntare lalāṭam virājati sadā nityaṁ ...

あらゆる恐れ¹²が、額の眉間にティラカがなされているならば¹³、その瞬間に鎮まる。

*12 4.19の *śītavātāśinondurabhaya* に関する校訂註を参照。この校訂註に示す後者の引用箇所 [f.76r5] には、当該の複合語と非常によく似た用例を確認できる。この類似箇所の Tib. は、*grang(P: krang) pa dang rlung dang nyi tshan dang byi ba kha gdug(P: bdug) pa'i jigs pa* である。おそらく、ここでは *asinondura* という複合語を、語順が逆になるが、*byi ba*(鼠 → undura?) と *kha gdug pa*(毒蛇 → asina?) と読んでいる。[f.76r5] の用例における対応関係を見る限り、当該の複合語 *śītavātāśinondurabhaya* の後部は、「毒蛇(āśina?)や鼠(undura?)の恐れ」と解釈できる。おそらく *āśis*(蛇の毒牙)に由来する語と *undura*(鼠)からなる複合語に何らかの corruption があったのだろう。いずれにしても、文脈からは何らかの自然災害あるいは危害を与える有毒動物を表す語だと考えられる。

*13 和訳註 10 参照。

5.8 pūjanīyo ॥ まず pūjīnīyo の jī の i がキャンセルマークによってキャンセルされ、次にそのキャンセルマークのついた i の部分全体が消されているように見える。

- 5.16 एवा श्रुत्य एव वृष्णिं ददीशं शमनं कदं नु श्रुणाम् एव कर्मा श्रीमां धमं एव वृष्णिं एव वृष्णिं त्रिदं श्रुत्य
 5.17 वृष्णिं वृष्णिं एव शमनं कदं ददीशं एव वृष्णिं र्षी । श्रीमां एव वृष्णिं ददं नु श्रुणाम्
 5.18 एव श्रुत्य एव वृष्णिं । वृष्णिं एव वृष्णिं । वृष्णिं एव वृष्णिं एव वृष्णिं । एव वृष्णिं । एव वृष्णिं
 5.19 वृष्णिं एव वृष्णिं । वृष्णिं एव वृष्णिं । (D f. 191r) वृष्णिं एव वृष्णिं एव वृष्णिं । एव वृष्णिं । एव वृष्णिं
 5.20 एव वृष्णिं एव वृष्णिं ।
 5.21 एव वृष्णिं ॥
 5.22 śatruśatasahasrasainyamadhye yodhyān tilaka-m-iva prabhāvāt śīghram
 5.23 eva jināti. raṇakalivyavahāre sadyas eva praśānti. tadānena maṇiband-
 5.24 hena mūrdhacūḍāmaṇir yaḥ tilakam ca kṛtvā cakram lepayet paracakrarāṇa-
 5.25 madhye praveṣṭavyam, ekenātmabhāvena caturaṅgaṁ balakāyam vijeṣati.
 5.26 anayā sarveṣu praviṣṭamātreṇa anayā vyasanam āpadyante, daśavidisāni pra-
 5.27 palāyante, sarve pralayam āpadyante. tilakam kṛtvā rājakuṭam praviṣed rājā-
 5.28 naṁśāntahpuraparivārām vaśagatām upatiṣṭhanti. yāvaj jīvena pūjanīyo bhav-
 5.29 isyati. dakṣiṇābāhūmī maṇīm baddhvā tilakam aṅga-m-aṅgāni kārayan sarva-
 5.30 tra jayam āpnoti, spr̄ṣṭamātrā vaśamkara, yam yam yāpayase arthaṁ tat sar-
 5.31 vam labhisyati.

【和訳】10万の敵対する軍隊の中で戦う場合、ティラカがなされたならば¹⁴、[そのティラカの]威光によって、非常に速やかに敵対する軍隊を征服する。争い、不和、係争の場合、[ティラカがなされたならば]非常に速やかに鎮まる。摩尼を結んで、頭頂の髪に摩尼を有するそのときに、またティラカをな

*14 和訳註 10 参照。

5.19 'tsho'i bar du || D; 'tsho'i P 5.20 yan || D; nyding P 5.21 bsgrub || D; bsgrubs P

5.22 prabhāvāt] conj. ← *mthus* Tib., 校訂註 3.41 も参照。同様の形を確認できる。
5.26 anayā] em. ← 'dis Tib. 5.26 sarveṣū] em. ← *thams cad du* Tib. 5.27 –
28 rājānāṁśāntahpuraparivārām] em. ← 密教聖典研究会 [2015: §9.11–12] ātmānāṁśā vas-
tram dhūpayatā rājakulam pravīśed rājānāṁśāntahpuraparivārā vaśagatā bhavishyanti. および密教
聖典研究会 [2015: 和訳註 6] を参照。 5.29 manīṣ] em. ← *nor bu* Tib. 5.29 tilakam]
em. ← *thig le* Tib.

して、チャクラに塗りつけ、敵の軍勢との戦争の中に入るならば、自分の身一つで四支軍を打ち破るだろう。この者があらゆる[戦争の]中に入るや否や、[敵の軍勢]全てがこの者によって打ち負かされて、十方に退散し、滅びるのである。ティラカをなして、王宮に入るならば、王妃とその取り巻きたちが[行者の]自由になるだろう。命ある限り、供養されるべき者となるだろう。右腕に摩尼を結びつけて、体中にティラカをなすならば、全てにおいて勝利を得て、[行者が]触れるや否や[その者を]支配下となし、到達するあらゆる目的のそのすべてを得るだろう。

- 6.1 §6 guḍikāmukhato gṛhya ālape sahasaṅgati | sarvve vaśagatā bhonti rājāna-
 6.2 m=antahpuropi vā | śramaṇam brāhmaṇam caiva kṣatriyam sūdram=eva ca | strī
 6.3 puruṣeś=caiva *dāraka(MS^{pe}; dārako MS^{ac})dārikāpi vā | sarvve te vaśavartī
 6.4 bhonti preṣyakarmāṇi sarvathā

६.५ इप्सा वृद्धा दीप्तस्तुषा श्वरा॥ श्वरं क्षेषा वृद्धा एव श्वरं त्रिं॥
 ६.६ शशमा तद्वृद्धान्तस्तुषमा॥ त्रुष्मा वृद्धा दीप्तस्तुषमा॥ ३

- 6.7
 6.8 र्णा श्वरं वृद्धा दीप्तस्तुषमा तद्वृद्धा॥ त्रुष्मा इषामा वृद्धा दीप्तस्तुषमा तद्वृद्धा॥
 6.9 श्वरं एव वृद्धा दीप्तस्तुषमा तद्वृद्धा॥ त्रुष्मा वृद्धा दीप्तस्तुषमा तद्वृद्धा॥
 6.10 वृद्धा शशमा तद्वृद्धान्तस्तुषमा॥ त्रुष्मा वृद्धा दीप्तस्तुषमा तद्वृद्धा॥ ४

- 6.11 guḍikāmukhato gṛhya ālapet sahasamgatim |
 6.12 sarve vaśagatā bhonti rājā-m antahpurāpi vā || 3 ||

- 6.13 śramaṇam brāhmaṇam caiva kṣatriyam sūdram eva ca |
 6.14 strī puruṣah caiva dārakadārikāpi vā |
 6.15 sarve te vaśavartī bhonti preṣyakarmāṇi sarvathā || 4 ||

【和訳】

6.5 ril bu ॥ D; ri lu P 6.9 bu mo ॥ D; bud med P

6.12 bhonti ॥ 校訂註 3.41 を参照。 6.15 bhonti ॥ 校訂註 3.41 を参照。

3. [行者が] 丸薬を口にしてから、会合に話しかけるならば、すべての者が [行者の] 自由となり、王や妃であっても [行者の自由となる].

4. 沙門、バラモン、クシャトリヤ、シュードラや、男性や女性、あるいは少年や少女であっても、彼ら全てが [行者の] 自由になり、あらゆることに関して促された行為を [なす].

- 7.1 §7 guđi₍₃₎kābhuktamātrā tu sarvve vyādhim vinaśyanti | jvaraṁ cāturthako
 7.2 yasya ye ca yakṣavyādhihatā yasyāsyā satatajvaraṁ kalaho yatra vavartteta
 7.3 janavidveṣaṇas tathāḥ | ātmacchāyāparacchāyā skandhāśoṣa-m=apasmāra
 7.4 ye cānye grahadārunā | pāpakarmasamācārā pūrvvakarma sudāruṇā sarvve
 7.5 te kṣaṇamātreṇa vinasyanti guḍikāśrapanamātrayā | gaṇḍalutavikāreṣu (4)
 7.6 lehaliṅgavicarccikāḥ | bhagaddaravisartham śvitrakakuṣṭhavicarccikam
 7.7 *viṣayen=teṣu(MS^{ac}; viṣan=teṣu MS^{pc}) sarvve ye daṣṭāvāsukidaṣṭakā liptamā-
 7.8 tra praśamam yānti sadyah sarvva bhavanti nirvviṣāḥ |
- ३४·सुर्क्षा·प॒र्त्तम्·श्री॑ष्टि॒॥ दृ॒द्ध॒क्षमा॒षमा॒त्त॒द्ध॒क्षमा॒प॒र्त्तम्॥
 ७.9 ए॒द्व॒षी॒त्रिं॒ष्टि॒प॒र्त्तम्॒प॒र्त्ति॒र्म॒षी॒ष्टि॒॥ ए॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षी॒त्त॒द्व॒षी॒ष्टि॒॥
 ७.10 ए॒द्व॒षी॒त्त॒द्व॒षा॒प॒र्त्ति॒र्म॒षी॒ष्टि॒॥ ए॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥
 ७.11 ए॒द्व॒षी॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ ए॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥
 ७.12 ए॒द्व॒षी॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ ए॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥
 ७.13 ए॒द्व॒षी॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ ए॒द्व॒षी॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ ५
- ३५·श्री॒प॒र्त्तम्॒प॒र्त्तम्॒त्त॒द्व॒षा॒॥ श्री॒प॒र्त्तम्॒प॒र्त्तम्॒त्त॒द्व॒षा॒॥
 ७.14 दृ॒द्ध॒क्षमा॒षमा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ दृ॒द्ध॒क्षमा॒षमा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥
 ७.15 दृ॒द्ध॒क्षमा॒षमा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ दृ॒द्ध॒क्षमा॒षमा॒त्त॒द्व॒षा॒त्त॒द्व॒षा॒॥ ६
- 7.3 ātmacchāyā ॥ 2 文字分が消された後、そのスペースに収まるように小さな文字で tmacchāyā と書かれている。 7.5 gaṇḍalutavikāreṣu ॥ ḡda と ta の間の 1 文字が消された後に lu と訂正されている。
- 7.9 ril bu ॥ D; ri lu P 7.13 bzad ॥ D; zad P 7.15 gyi ॥ D; gyis P 7.16 ril bus ॥ D; ri lus P

- 7.17
7.18
7.19
7.20
7.21
- स्त्रीं ददृशुं एव विश्वासं क्षमेण ददृशुं ददृशुं ॥
सक्तं सर्वाद्यत्प्राप्तं ददृशुं ददृशुं ॥ त्रिलोकं ददृशुं ददृशुं ॥
क्षीं ददृशुं क्षमेण गुणं ददृशुं ॥ एवं ददृशुं क्षमेण गुणं ददृशुं ॥
वृषाणां ददृशुं ददृशुं ॥ वृषाणां ददृशुं ददृशुं ॥ 7
- 7.22
7.23
7.24
7.25
7.26
7.27
- guḍikābhuktamātrā tu sarvavyādhiṃ vinaśyati |
jvaraṃ cāturthako yasya ye ca kṣayavyādhihatam |
yasyāsyā satatajvaram |
kalaho yatra vartate janavidveṣaṇas tathā |
ātmacchāyāparacchāyā skandaśoṣa-m-apasmārah |
ye cānye grahadārunāḥ || 5 ||
- 7.28
7.29
7.30
- pāpakarmasamācārāḥ pūrvakarma sudāruṇāḥ |
sarve te kṣanamātreṇa vinaśyanti |
guḍikāsnapanamātrayā || 6 ||
- 7.31
7.32
7.33
7.34
- gaṇḍalūṭavikāreṣu lohaliṅgavicarcikāḥ |
bhagaṇḍaravisarpaṇ śvitrakakuṣṭhavicarcikaṇ |
viṣame teṣu sarve ye duṣṭavāsukidaṣṭakā |
liptamātrāṇ prāśamāṇ yānti sadyāḥ sarve bhavanti nirviṣāḥ || 7 ||

【和訳】

7.20 dag ॥ D; gi P

-
- 7.22 sarvavyādhiṃ vinaśyati ॥ em. ← nad rnams thams cad rnam par 'jig Tib.
7.23 kṣayavyādhihatam ॥ em. ← khong skem nad kyis nyams Tib. 7.30 guḍikāsnapanamātrayā ॥ em. ← ril bus khrus byas tsam gyis Tib. 7.31 gaṇḍalūṭavikāreṣu ॥ em. ← 'bras dang shu bar 'gyur rnams dang Tib. 7.31 lohaliṅgavicarcikāḥ ॥ em. ← lhog pa dang ni rkang shu dang Tib. 7.32 bhagaṇḍaravisarpaṇ ॥ em. ← mtsan par rngol dang me dpal dang Tib. 7.33 viṣame ॥ conj. ← mi bzad Tib. 7.33 duṣṭavāsukidaṣṭakā ॥ em. ← nor rgyas sdang bas zin Tib.

5. 丸薬を口にするや否やあらゆる病が消滅する^{*15}. 四日熱^{*16}, 消耗を引き起こす病^{*17}による害, 每日二回熱^{*18}が [消滅する]. 不和が生じた場合, 同様に人々の仲違いが [消滅する]. 自身の影や他者の影, [病を引き起こす] スカンダ, ショーシャ^{*19}, アパスマーラや, 他の恐ろしいグラハたちが [消滅する].
6. 丸薬で清めるや否や瞬時に, 悪業や悪行, 過去における残酷な諸業, それら全てが消滅する.

7. 瘡瘍, 皮膚病, 血膿瘍, 疥癬, 痔瘻, 丹毒, 白斑, ハンセン

*15 当セクションでは, 以下に続くような種々の病気や症状に効果のある丸薬の製法は説かれていない. §11の冒頭に, 丸薬の生成法と思われる簡略な記述を確認できるが, 当該箇所で言及する丸薬と§11に説かれる丸薬が一致しているかどうかは不明である. なお, *Amoghapāśakalparāja* と同様に初期密教經典に位置づけられる *Mañjuśriyamūlakalpa*(この經典の原題をめぐる問題については DELHEY [2012] を参照.) 第9章には, アーユル・ヴェーダに依拠した呪術的治病法が説かれている. そこには, 多種多様な病気や症状が列挙されており, 個々の病状に対する薬の生成法やその服用法に関する記述が認められる. 詳細は大塚 [2010] を参照.

*16 *Suśrutasaṃhitā*, ch.6.39(jvarapratīṣedha)-v.71ab には, tṛṭīyakas tṛṭīye 'hni caturthe 'hni caturthakah /「三日熱は三日目 [毎] に [発症し], 四日熱は四日目 [毎] に [発症する].」とある. 詳細は大地原 [1979: pp.687-688] を参照.

*17 *Suśrutasaṃhitā*, ch.6.41(śoṣapratīṣedha)-v.4. には, samśoṣanād rasādīnām śoṣa ity abhidhīyate / kriyākṣayakaravāc ca kṣaya ity ucyate punah //「体液などが乾燥することから, śoṣa と称せられ, また活動の減退をなすことから, ksaya と称せられる.」とある. したがって, 当該箇所の kṣavyādhī は体力や精力の消耗を引き起こす病と考えられる. また, 上記の引用箇所 (*Suśrutasaṃhitā*, ch.6) は, śoṣapratīṣedha という章題であり, śoṣa(「肺病」「肺勞(肺結核)」) の対処法を説いていることから, kṣavyādhī は肺に関する疾患の一種を示す固有の病名とも考えられる. 詳細は大地原 [1979: pp.718-719] を参照.

*18 *Suśrutasaṃhitā*, ch.6.39(jvarapratīṣedha)-v.70ab. には, ahorātre satatako dvau kālāv anuvartate / 'satata 熱は, 昼夜二回発症する」とあり, satatajvara は特に昼と夜の二回症状の現れる熱病だと考えられる. ここでは大地原 [1979: p.687] に依拠して, satatajvara を「毎日二回熱」と訳出した.

*19 和訳註 17 で言及したように, アーユル・ヴェーダ文献の記述から, śoṣa は肺に関する疾患を示す語だと考えられるが, 当該箇所の文脈では得体の知れない病を引き起こす鬼魅, 鬼靈の一種と考えられる.

病, 疥癬, 有毒なヴァースキ龍王によって噛まれた症状, それら全ての恐ろしい病状が[丸薬を]塗るや否や, すぐに鎮まり, 全てが無毒となる.

8.1 §8 mṛtasamjīvanī divyam guḍikā sarvakarmikāḥ |

ଶ୍ରୀ ସୁଷ୍ମାରା ଦନ୍ତପାତ୍ରିଣୀ || ଶ୍ରୀ ଶ୍ରୀ ସଂକାରିଣୀ ||

8.3 mṛtasamjīvanī divyam guḍikā sarvakarmikā || 8 ||

【和訳】

8. 神聖なる丸薬は, 死者を蘇生させ, あらゆる儀礼行為に用いられる.

9.1 §9 guḍikādhāryamāṇasya tilakā*kriya(MS^{pc}; kriyā MS^{ac})māṇayā *sarvva-
9.2 tra(MS^{pc}; sarvvatraya MS^{ac}) labhate pūjāṁ sarvvatra dhanam=āgamam
9.3 śrīkāmo labhate śriyan=adhārthī dhānyarā₍₅₎śiṣu pravarddhate | priyo bha-
9.4 vati devānāṁ nāgānāñ=cāpi sapriyah | yakṣarākṣasagandharvāsuragaruḍakin-
9.5 naramahoragasarvvabhbhūtānāṁ ca sapriyah | *vandanīya(MS^{pc}; vandanīyā
9.6 MS^{ac}) sadā bhavet sarvve vaśagatā tiṣṭhanti | sarvve tiṣṭhanti dāśa kiñ=karāḥ
9.7 | yojetā guḍikā sevayate nityam guḍikā sevayate nityam guḍikātilakam eva
9.8 ca | samanvāharanti tā tathāgatāt=sarvve ₍₆₎ āryāvalokiteśvara varado bha-
9.9 vati nityam sadākālaṁ darśanam tattvavita | puṇyaskandhasahasrāṇi sañ-
9.10 cinoti dine dine sukham laukikī bhuktam paraloka(MS^{ac}; paraleka MS^{pc})
9.11 paramam sukham | janmanā parivarttante na | sukhāvatī sadya gacchati | jātī
9.12 jātismaro nityam yatropapadyate vajrapāṇir=mahāyakṣo yakṣakoṭiparivṛtaḥ

9.8 tathāgatāt 】末尾の t のキャンセルを消したように見える。 9.12 nityam 】2 文字分消された後に nityam と書写され, tyam の後ろには不明の記号がついている。また写本の当該箇所下方の欄外には, おそらく nityam と読める書き込みがある。

8.2 ril bu 】 D; ri lus P

9.14 ril bu ॥ D; *ri lu* P 9.17 'bru yi ॥ D; '*bru'i* P 9.24 ril bu ॥ D; *ri lu* P 9.26 ril bu ॥ D; *ri lu* P 9.31 pa vi ॥ D; *pa'i* P 9.34 pa vi ॥ D; *skvas* P

- 9.39 guḍikādhāryamāṇasya tilakākriyamāṇayā |
 9.40 sarvatra labhate pūjāṁ sarvatra dhanam āgamam || 9 ||
- 9.41 śrīkāmo labhate śriyam dhānyārthī dhānyarāśisu
 9.42 pravardhate || 10 ||
- 9.43 priyo bhavati devānāṁ nāgānāṁ cāpi sapriyah |
 9.44 yakṣarākṣasagandharvāsuragaruḍakinnaramahorasarvabhūtānāṁ
 9.45 ca sapriyah || 11 ||
- 9.46 vandanīya sadā bhavet sarve vaśagatāḥ tiṣṭhanti |
 9.47 sarve tiṣṭhanti dāsa kiṁ karāḥ yojetā guḍikā || 12 ||
- 9.48 sevayate nityam guḍikātilakam eva ca |
 9.49 samanvāharanti tathāgatāḥ sarve |
 9.50 āryāvalokiteśvaro varado bhavati nityam |
 9.51 sadākālam darśanām tattvavidām || 13 ||
- 9.52 puṇyaskandhasahasrāṇi sañcīnoti dine dine |
 9.53 sukham laukikīṁ bhuktam paralokam paramam sukham || 14 ||
- 9.54 janmaparivartanena sukhāvatīm sadya gacchati |
 9.55 jātau jātismaro nityam yatropapadyate || 15 ||
- 9.56 vajrapāṇīr mahāyakṣo yakṣakoṭiparivṛtaḥ |

9.41 dhānyārthī] em. ← 'bru 'dod Tib. 9.48 sevayate nityam guḍikātilakam] 当該箇所は sevayate nityam guḍikā が重複して書写されている。 9.49 tathāgatāḥ sarve] em. ← de bzhiṇ gshegs kun dgongs pa mdzad Tib. 9.51 tattvavidām] conj. ← de nyid rig la Tib. 9.53 laukikīṁ] conj. ← jig rten pa yi Tib. 9.54 janmaparivartanena] conj. ← tshe brje ba ni 'phos na su Tib. 9.54 sukhāvatīm] em. ← bde ba can du Tib. 9.54 sadya] 本来は sadyas であろうが、韻律上、語末の子音 s が落ちたと考えられる。同様に、語末の子音 s が落ちた形を以下にも確認できるが(10.63)、韻律との関係は定かではない。 9.55 jātau] em. ← 密教聖典研究会 [2015: §6.23] jātau jātismaraś ca bhavisyati.

9.57 sadākālam rakṣāvaraṇaguptiś ca |
 9.58 rakṣante divārātram atandritam || 16 ||

【和訳】

9. 丸薬を受持しつつ、ティラカがなされている者は、あらゆる場合で供養を得て、あらゆる場合で富財がもたらされる。

10. 幸運を望む者は幸運を得て、穀物を求める者は大量の穀物を増産する。

11. [行者は]諸天に好まれる者となり、またナーガたちにも好まれる者となる。またヤクシャ、ラークシャサ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、あらゆる鬼魅たちに好まれる者[となる]。

12. [行者は]常に恭敬されるべき者となり、あらゆる者たちが[行者の]自由になるのである。丸薬が適用されるならば、あらゆる者たちが[行者の]奴隸となる。

13. また常に丸薬とティラカを作用させると、全ての如来が護念し、観自在が常に願いを叶え、いつでも真実を知る者に姿を現す。

14. 日々、何千もの功德を積集し、世間の安樂を享受し、来世において最上の安樂を[享受する]。

15. 転生することによって、すぐに極楽に趣くのである。どこ

9.58 atandritam || em. ← g-yel ba med par Tib.

に生まれようとも、生まれるときに必ず過去世の記憶を有する^{*20}。

16. [行者は] 金剛手大薬叉となり、10万の薬叉によって取り巻かれ、またいつでも [10万の薬叉によって] 守護や防衛や保護があり、[10万の薬叉たちは] 昼夜倦怠せずに守護するであろう。

- 10.1 §10 (7) yasya vām* bhavet* | putro striyā vā putra kāmkṣīṇah | guḍikā
 10.2 ekasamyukto mantram japtā samāhitah pūrṇam sitasahasrāṇi pūrṇapakṣe tu
 10.3 paṇḍitah snapanaṁ nararanārīṇāṁ pūrṇapāñcadaśyām vā tilakam=aṅga-m-
 10.4 aṅgāni kārayet=triratnaparamam pūjya brāhmaṇam cāpi bhojanam rakṣāvid-
 10.5 hānañ=ca kurvītaḥ | tṛśuklabalimanḍalam karet* ātmālaṅkāreṇa śucivast-
 10.6 trāṇi prāvaret* | maitra_(f.100r1)*citta(MS^{pc}; citte MS^{ac}) samāsthāya karuṇāsat-
 10.7 vavatsalah paśalāśayaśuddhaś=ca gurubhaktah sadā bhavaḥ nānāpūṣpa-
 10.8 prakīrṇañ=ca nānāgandhavilepanaiḥ | dīpa dhūpana dhūpyetaḥ | turuṣka-
 10.9 candanasallakīḥ | guḍikām=bhojayet sapta kṣīraguḍasamāyutam | sadya pīta-
 10.10 m=idam guhyapāna bhojana *bhojya(MS^{pc}; bhojyam MS^{ac})yam pūjayam
 10.11 | avalokitanāthasya varadātāra *vatsala(MS^{pc}; vatsalā MS^{ac}) tasyaiva pā-

^{*20} 極楽世界に趣くことを始めとする良き後生を得ることや、過去世の境遇を知る宿命智を得ることは、本經所説のパタを見ることによって得られる功德の中にも確認できる。密教聖典研究会 [2000: 45b7–46a1] 「パタ作製儀則」 cyutāḥ sarvve asya darśanamātrayā sukhavatyā lokadhātāv upapatsyante// sarvve ca satvā sukhāvatīṣu gāminā bhaviṣyati// sappatikalpaśatasahasrāṇi jāṭī jāṭismaro bhaviṣyati「この[パタを]見るだけで、全ての者たちが極楽世界に転生するだろう。また全ての有情が極楽へ行く者となるだろう。700万劫の間、過去世の記憶を有する者となるだろう。」

10.12 damūla svapatārātīpratyuṣam lubhate darśana₍₂₎m=uttamaṃm★ | āryāval-
 10.13 okiteśvara varadam★ svarūpam darśanam ddāsyati | dāsyate varam=uttamam
 10.14 putram janayate sā strīḥ abhirūpoparamadarśanīyah | balavān=rūpasampanno
 10.15 divyaśīrī=anugacchati | dhārmiko paṇḍito vyaktah | dīrghāyuḥ | aiś-
 10.16 varyam=anulambhavet★ | śūra jitaśatruś=ca sarvvaduṣṭapramardako bhavet★
 10.17 |

10.23
10.24 यक्ष-सा-यक्ष-सा-शीरा-से-हु॥ र्गोद-कर्क्ष-सा-शुष्मा-दि-योगा-कर्क्ष-कीरा-
10.25 शुष्मा-ते-द्वा-गुरु-कर्क्ष-कर्क्ष-त्रिद्॥ वज्रां-वरी-कर्क्ष-हुरा-कर्क्ष-शु॥ 19

10.26
10.27
10.28
 ଶାର୍ଦ୍ଦମ୍ ମା ଦ୍ୟାମ ସାମ୍ରାଜ୍ୟ ମଦହୁକ ସମ୍ପଦ୍ୟ ॥ ନଦୀଶ ତୈର୍ତ୍ତିର୍ଣ୍ଣ ଶ୍ରୀ ସକ୍ଷୁର ନନ୍ଦ ଶ୍ରୀ
 ଶ୍ରୀଶ ଶାର୍ଦ୍ଦମ୍ ହୁଲାଶ କୁର୍ମା କୁର୍ମା ସମ୍ପଦ୍ୟ ॥ 20

10.32
10.33
10.34

ପେର୍କା ଶୁଣ୍ଠିଷାନ ସମ ଦୟାର ଜିନ୍ଦା || ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ ପାଦ ଶୁଣ୍ଠିଷାନ ଦୟା
ତୁମୁଳ ତର୍କ ଦୟା ପାଗୀ || ଯୁଧୀ ପଦମା ପଦମା ପଦମା ପାଦ ଜିନ୍ଦା 22

10.12 lubhate] lu の一字は、何らかの文字を訂正した後に、おそらく lu と読める文字が記されている。 10.12 darśana₍₂₎m] rśa の一字は、何らかの文字を訂正した後に、おそらく rśa と読める文字が記されている

10.18 bud ॥ P; *bu* D; 10.19 ni ॥ D; *cig* P; 10.22 *bcu* ॥ corr.; *bcba* PD 10.34 sa ॥
P; *sā* D 10.34 ki ॥ D; *gvi* P

- 10.57 ūcivastrāñi prāvaret || 20 ||
- 10.58 maitracitta samāsthāya karuṇāsattvavatsalah |
10.59 peśalāśayaśuddhaś ca gurubhaktaḥ sadā bhavaḥ || 21 ||
- 10.60 nānāpuṣpaprakīrṇam ca nānāgandhavilepanaiḥ |
10.61 dīpa dhūpana dhūpyeta turuṣkacandanasallakīḥ || 22 ||
- 10.62 guḍikāṁ bhojayet sapta kṣīraguḍasamāyutāṁ |
10.63 sadya pīta-m idam guhyapānam bhojanam bhojyam || 23 ||
- 10.64 pūjayan avalokitanāthasya varadātāram |
10.65 vatsalam tasyaiva pādamūlam |
10.66 svapanarātrīpratyuṣam labhate darśanam uttamam || 24 ||
- 10.67 āryāvalokiteśvaro varadam svarūpam darśanam |
10.68 dāsyati varam uttamam putram janayate sā strīḥ || 25 ||
- 10.69 abhirūpaparamadarśanīyo balavān |
10.70 rūpasampanno divyaśrīr anugacchati dhārmikāḥ |
10.71 paṇḍito vyakto dīrghāyur aiśvaryam anulambhayet |
10.72 śūro jitaśatruś ca sarvaduṣṭapramardako bhavet || 26 ||

【和訳】

17. ある者に息子がいないならば、あるいは女性が息子を望む

-
- 10.61 dīpa] 当該箇所は、v.20 の内容を含めると、密教儀礼における五種供養(花、焼香、灯明、塗香、食物)の文脈と解釈できることから、写本の読みのままの dīpa としたが、Tib. には *lha yi bdug pas bdug bya zhing* とあるため、divyadhūpana というような読みの可能性もある。
 10.64 varadātāram] em. ← *mchog shbyin mdzad par* Tib. 10.65 vatsalam] em. ← *byams mdzad* Tib. 10.65 pādamūlam] em. ← *zhabs drung du* Tib. 10.66 svapanarātrīpratyuṣam] em. ← *mtshan mo nyal dang nang par* Tib. 10.66 labhate] em. ← *thob par 'gyur* Tib.
 10.68 dāsyati] 当該箇所は dāsyate が重複して書写されている。

ならば、[行者は] 丸薬を一粒飲み、マントラを唱えて、[尊格と] 一体化し、

18. 賢者は、白分に 10 万回 [の念誦を] 終えて、満月の 15 日目に、男女たちに沐浴させ、

19. ティラカを全身につけさせるべきであり、三宝を供養すべきである。バラモンにもまた食事を用意し、そして守護の儀則をなして、

20. 諸々の三つの白いバリを捧げて、自身の装飾をつけて、きれいな白い衣服を着るべし。

21. 慈しみの心の状態で、有情に対して悲と愛情を有し、また美しく着飾り清らかな気持ちで、常に師に帰依して、

22. 様々な花を散りばめて、様々な塗香を塗り、灯明と香を焚くべきであり、[香は] *Turuṣka*, 梅檀, *Sallakī* である。

23. 乳液と丸砂糖の混ざった七つの丸薬を口にさせるべし。直ちにこの秘密の飲み物(丸薬)を飲み、食事をとるべきである。

24. 見守り、願いを叶え、愛情を [本質とする]、かの [観自在の尊像の] 足下に供養すると、夜や夜明けの夢の中で、最勝者の姿を見るのである。

25. 聖観自在が願いを叶え、御自身の姿を顯現するであろう。[観自在が] 最上の願いを叶え、かの女性は息子を産むであろう。

26. [その息子は] 容姿端麗で一見の価値があり、力強く、美しく、神々しい気品が伴い、有徳で、聰明で、賢く、長寿で、支配権を得るだろう^{*21}。また、勇敢で敵に打ち勝つ者となり、あらゆる悪者を打ち碎く者となるだろう。

*21 このような現世利益を得ることが説かれている点から推測すると、当該の儀礼のスポンサーは、王族やそれに類する者と考えられる。

11.2 nrena】 おそらく書写生は、tena と書きたかったように思われる。しかし、書写された文字は nrena と読める。

11.10 der || D; *dang* P 11.10 ril bu || D; *ri lu* P 11.11 rtsam || P; *tsam* D 11.13 mdo'i
|| D; *mdo* P

11.17 ४॥

- 11.18 athavā smṛtibuddhipravardhayitukāmena śrutim āśādya tiṣṭhati. tena vidyād-
 11.19 hareṇa śucinā saptarātreṇa kṣīragṛhtakvathitenā dine dine saptaguḍikā tatra
 11.20 bhāvaya sukhoṣne. prathamena proktena ekaviśam̄tvārān pari�apy pītavyam̄
 11.21 paścād bhojanam̄ bhoktavyam̄. saptarātreṇa mahāśrutisāgarasam̄nicayo bha-
 11.22 vati, sarvaśāstrāṇī nayavinayakāvyavyākaraṇasūtrageyagāthodānanidāne-
 11.23 tivṛttakajātakābhidharmagaṇanakalpamantramudrāsarvamahāyānāt mukhā-
 11.24 gre 'vatiṣṭhanti.

【和訳】あるいはまた、記憶力と智を増長させようと望むならば、聖典を置いておくのである^{*22}。かの清らかな持明者が、7日間毎日、乳液とバターを煮て、その程よく温まった中で、7つの丸薬を生成すべし。まず始めに、21回マントラを唱えてから、[丸薬を]飲むべきであり、その後に、食事をとるべきである。7日間経つと、偉大な聖典が大海の如く広大に積集し、あらゆる教え、[すなわち]、Naya(道徳), Vinaya(律), Kāvya(洗練された優雅な文学), Vyākaraṇa(問答, 授記)^{*23}, Sūtra(經), Geya(重頌), Gāthā(偈頌),

*22 本經の別の章にも、丸薬の作用によって、同様の利益を得られることが説かれている。密教聖典研究会 [2000: 38a7–38b1] dine dine anālāpataḥ pratyuṣe ekaikaṁ rocanagullikā amogharājahrdayena japatā bhakṣayam̄ pratha[m]divase ślokasahasram paṭhati dhārayati dine dine dviguṇavardhamānaṁ paṭhati dhārayati / saptarātre mahāśrutiḥ pravardddhate / dvisaptāhayuktena kinnarīsaha(ma)svaraghoṣo bhavati / trsaptāhaprayuktena mahāśrutiśāgarasam̄nicayo bhaviṣyati / 每日誰とも会話することなく、夜明けに一粒ずつ丸薬を、不空王心呪を唱えるとともに食べて、初日に千偈を読誦し、保持するのである。毎日、二倍に増やしながら、読誦し、保持するのである。[そうすれば]7日目に、広大な聖典に膨れ上がるのである。14日間行うと、キンナリーと同様の声色になるのである。21日間行うと、偉大な聖典が大海の如く積集するであろう。

*23 Vyākaraṇa は、前の Kāvya との関係を考えると文法学と解釈した方がよいだろうが、ここでは後ろに列挙される項目が十二分教を示唆しているので、十二分教の中の Vyākaraṇa と理解しておく。

11.18 śrutim] em. ← thos pa Tib. 11.20 pītavyam̄] em. ← 'thungs Tib. 11.21 bhojanam̄] em. ← kha zas Tib. 11.23 –24 mukhāgre 'vatiṣṭhanti] conj. ← kha ton du lobs par 'gyur ro Tib.

Udāna(感嘆の語), Nidāna(因縁物語), Itivṛttaka(事績の物語), Jātaka(本生譚), Abhidharma(論), gaṇana(算数), Kalpa(規則), Mantra(真言), Mudrā(印契)などのあらゆる大乗が^{*24}, 面前にとどまるだろう.

*²⁴文脈上、主語として訳出した。チベット語訳も、当該箇所の長い複合語を主語として訳している。

*25 訂正された後におそらく pra と読める文字が記されている

12.5-6 pratispurddhā ॥ pratispurddhā の ti は、tā の長母音が消された後に、おそらく ti と読める文字に強引に訂正されている。

12.10 kyi ॥ D; *kyis* P 12.16 'od ॥ D; *'id* P

12.19 trisaptāhaprayuktayā mahābalavīryaparākramo bhavati, daśanāgasahasra-
 12.20 balo bhavati. māsamātraprayuktena pañca varṣaśatāni jīvati, valīpalitavarji-
 12.21 taḥ, ākuñcitakuṇḍalakeśo bhaviṣyati, padmagaurasamaśarīravarṇo bhaviṣy-
 12.22 ati. saṃvatsaraprayuktena divyarasāyanavaram pravartate, devaiḥ saha samā-
 12.23 nagaganatale ca vicarati, śakraś ca saha pratisardhā bhaviṣyati. divyade-
 12.24 vāpsaragaṇadivyavimānakrīdāratī, saptaratnabhavanavimānavāśī bhaviṣy-
 12.25 ati, sūryasadṛśaprabhāpramuñcanamānair vicarati, bhavanavarair anuvicarati.
 12.26 na sahamānam tejasā jvalantam suprabhāsvaram viśuddhair bhaviṣyatītī na
 12.27 samśaya-m iti.

【和訳】21日間[丸薬を]服用すると、力強い勇猛果敢な者となり、1万の象の力を有する者となるだろう。1ヶ月間[丸薬を]服用すると、500年間生き続け、[顔などの]しわや白髪が無くなり、編まれて螺旋状の髪を有し^{*26}、蓮華の白い輝きと同様の身色となり、諸天と共に同様に、空を飛行するであろう。1年間[丸薬を]服用すると、神々しい最上の不老不死の薬がはたらき、諸天と共に、空を飛行するだろう。またインドラ神と肩を並べるであろう。

^{*26} ākuñcitakuṇḍalakesa という語は、以下の密教文献にも確認できる。

Sarvatathāgatataṭṭivasaṃgraha [2836–2837] sarvasukhāṇi paribhuñjan dviraṣṭavarṣavapur ākuñcitakuṇḍalakesadharimahāvajravidyādharaḥ sarvatathāgatān savajrasattvān paśyan mahākalpasthāyī bhavatītī āha bhagavān sarvatathāgatavidyādharaḥ. あらゆる安樂を享受しつつ、16歳のような美しい容姿で、編まれて螺旋状の髪を有する偉大な金剛持明者となり、金剛薩埵を伴う一切の如来たちを觀察しながら、大劫の間その境地に位置するだろう。

Mañjuśriyamūlakalpa(この經典の原題をめぐる問題については DELHEY [2012] を参照。)[SED p. 291, ll. 12 – 13, p. 227, ll. 17 – 18] ākuñcitakuṇḍalakesaḥ dviraṣṭavarṣākṛtiḥ apanthadāyī agamyah sarvavidyādharaṇām̄ antarakalpaṁ jīvati. 編まれて螺旋状の髪を有し、16歳のような美しい容姿で、怖畏を与えることなく (apanthadāyin: BHSDic. p.45, aparipanthadāyin の項目を参照)、あらゆる持明者たちの到達できない[境地]の者となり、中劫の間生き続けるだろう。

以上の記述より、ākuñcitakuṇḍalakesa は勝れた持明者が有する身体的特徴の一つと考えられる。

12.21 ākuñcitakuṇḍalakeso] em. ← skra lcang lo 'khyil zhing 'khyil bar Tib. 12.23 pratisardhā] em. ← 'gran par Tib.

神々しい天女やアプサラスたちと神々しい宮殿において遊戯し、七宝でできた宮殿に住むだろう。太陽の如く光輝を放ちながら活動し、すばらしい宮殿で生活するだろう。まばゆいばかりに威徳を伴い燃え上がっていて、すばらしく光り輝き、清浄に^{*27}なるだろう。以上のこととは疑いない。

- 13.1 §13 [section colophon] sarvakarmasādhanatilakagudikācatasthāvidhisādhanam
 13.2 || ○ ||
 13.3 एवं शूष्णम् तद् एवं शूष्णम् एवं शूष्णम् एवं शूष्णम् एवं शूष्णम् एवं शूष्णम् ॥
 13.4 sarvakarmasādhanatilakagudikācaturthavidhisādhanam.

【和訳】あらゆる儀礼行為を成就するティラカと丸薬に関する第四の成就法。

参考文献

1. 一次文献

a. サンスクリット語文献

Amoghapāśakalparāja. サンスクリット語写本：『不空羈索神變眞言經梵文寫本影印版』北京・民族出版社、東京・大正大学綜合佛教研究所、1997. 中國民族圖書館原藏梵文貝葉寫本叢書. 密教聖典研究会 1998, 1999, 2000, 2001, 2004, 2010, 2011, 2015 も参照のこと。

Mañjuśriyamūlakalpa. (*Mañjuśrīmūlakalpa*). S_{ED}: T. Gaṇapati ŚĀSTRĪ (ed.)
The Āryamañjuśrīmūlakalpa. 3 volumes. Trivandrum Sanskrit Series 70, 76 and 84. Trivandrum: Superintendent Government Press, 1920 – 1925. : VAIDYA, Paraśurāma Lakshmaṇa (ed.) *Mahāyānasūtrasaṃgraha*, vol.2.

*27 梵本は、viśuddhair となっているが、チベット語訳(*rnam par dag par 'gyur ro*)にもとづいて、主格として訳出した。

13.3 ril bu ॥ D; ri lu P

13.4 -caturtha- ॥ em. ← *bzhi pa* Tib.

Sarvatathāgatataitvasamgraha. 堀内寛仁.『梵藏漢対照初会金剛頂經の研究
梵文校訂篇』(上)(下). 密教文化研究所. 1983(上) 1974(下).

Suśrutasamhitā. *Suśrutasamhitā of Suśruta with the Nibandhasaṅgraha
Commentary of Śrī Dalhaṇāchārya and the Nyāyacandrikā Pañjikā of
Śrī Gayadāsāchārya on Nidānasthāna.* TRIKAMJI, Vaidya Jādavji and
RĀM Nārāyaṇ (ed), reprint ed., Varanasi/Delhi: Chaukhambha Orientalia,
1992.(nidānasthāna, cikitsāsthāna, kalpasthāna and uttaratantra).

b. チベット語訳文献

(*'Phags pa*) *Don yod pa'i zhags pa'i cho ga zhib mo'i rgyal po.* Translation of
Amoghapāśakalparāja. Ota.365, *rgyud*, vol. *ma* ff. 1v1 – 255v2; Toh.686,
rgyud 'bum, vol. *ma* ff. 1v1 – 316r6.

c. 漢訳文献

不空羂索神変真言經. 菩提流志訳. 大正 No.1092. Vol. 20, pp. 227a4 – 398c29.

2. 二次文献

a. 和文

大地原誠玄. 1979. (大地原誠玄訳稿・矢野道雄解題)『古典インド医学綱要書
スシュルタ本集』臨川書店.

大塚恵俊. 2010. 「*Mañjuśrīmūlakalpa* 第9章における呪術的治病法について
– アーユル・ヴェーダの観点から –」『豊山教学大会紀要』38, pp. 19 –
40.

密教聖典研究会. 1998. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*
Part I」『大正大学綜合佛教研究所年報』20, pp. 304 – 251.

密教聖典研究会. 1999. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*
Part II」『大正大学綜合佛教研究所年報』21, pp. 154 – 107.

密教聖典研究会. 2000. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*
Part III」『大正大学綜合佛教研究所年報』22, pp. 372 – 309.

密教聖典研究会. 2001. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*

- Part IV」『大正大学綜合佛教研究所年報』23, pp. 406 – 331.
- 密教聖典研究会. 2004. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*
- Part V」『大正大学綜合佛教研究所年報』26, pp. (120) – (183).
- 密教聖典研究会. 2010. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*
- Part VI」『大正大学綜合佛教研究所年報』32, pp. (170) – (207).
- 密教聖典研究会. 2011. 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāśakalparāja*
- Part VII」『大正大学綜合佛教研究所年報』33, pp. (32) – (64).
- 密教聖典研究会. 2015. 「*Amoghapāśakalparāja* Preliminary Edition および和
訳註 – サンスクリット語写本 ff. 97v4-99r2 –」『大正大学綜合佛教研究所
年報』33, pp. (41) – (68).

b. 欧文

- DELHEY, Martin. 2012. "The Textual Sources of the *Mañjuśriyamūlakalpa*
(*Mañjuśrīmūlakalpa*), With Special Reference to Its Early Nepalese Wit-
ness NGMPP A39/4." *Journal of the Nepal Research Centre* 14, pp. 55 –
75.
- EDGERTON, Franklin. 1953. "*Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Diction-
ary*" 2 vols. (vol.1: Grammar → BHSgram., vol.2: Dictionary → BHS-
dic.) [reprint Delhi: Motilal Banarsidas 1993].